

# カナダ国際関係研究所 (Canadian Institute of International Affairs, 1928–2007<sup>1</sup>) 設立と国際関係研究 —カナダの大戦間期における国際関係観形成の構造

末内 啓子

## 1. 序

国際関係研究が大きく変化しつつある昨今において、安全保障や外交などの伝統的な 이슈ーに加え、政治、経済、社会、文化などの多岐な 이슈ーにも広がり、行為体にも国家以外の民間組織、民間人などを含め、イシューと行為体が多様化しつつある。もう一方、研究者の国際関係観が注目を集めている。P・M・ハース (Peter M. Haas) も、国際関係に関心をもつ研究者のネットワークを「エピステミック・コミュニティ」(“epistemic community”) と定義し、研究者が共有する認識、価値観を分析する必要性を説いた<sup>2</sup>。国際政治経済論では、R・W・コックス (R. W. Cox) が、エリートの価値観が政策過程に影響することを構造的な視点からも注目している<sup>3</sup>。したがって、研究者の国際関係観を検討することは、研究の土台を歴史の中で問い直すことでもある。つまり研究者に注目することは、イシューと行為体の多様化とも連動していることになる<sup>4</sup>。

カナダ対外関係研究の対象も、多様なイシューと行為体へと広がってきている。伝統的な研究は、加英関係、加米関係、カナダと国際連合というように、カナダを単一の行為体とみなし、エリートが担い手となる外交の時代に注目してきた<sup>5</sup>。ところが、最近の研究では、民族グループや NGO (非政府組織) や企業などの国境を越えた関係をも対象としている<sup>6</sup>。最近、カナダの対外関係について、問い直しの声が強まっている。かつての国際連合を中心にした外交と比較して、国際舞台でのカナダの存在感が薄れているとの危惧である。たとえば、対アフガニスタン政策では、米国の政策への協調とカナダの独自性とのジレンマが問われている<sup>7</sup>。そして、カナダ対外関係研究の視点を、米国の政策や研究との関係で見直すことが、研究の位置やその意義を問い直す大きな課題ともなっている<sup>8</sup>。

国際関係研究の育成と、その社会への発信を目指し、1928年に政治家や外交官に研究者らが、カナダ国際関係研究所 (CIIA) を設立した<sup>9</sup>。CIIA は、外務省のように対外関係に直接関係する行為体ではなかったが、研究とその発信をとおして対外関係の環境の一部をなす行為体であったとみなすことができよう。CIIA が開催する講演会や研究会議や出版物は、カナダ対外関係の研究者にとって貴重な研究発表の場であり、研究者同士が出会う場でもあった。CIIA は、設立当初、「英帝国」との関係の研究対象の中核とし<sup>10</sup>、当時すでに存在していた英国王立国際問題研究所 (Royal Institute of International Affairs, 以下 RIIA) と提携はするが、独立した組織であった<sup>11</sup>。

そこで、本稿は、国際関係の多様なイシューと行為体を前提として、研究の国際関係観を検討するために、カナダ国際関係研究所 (以下 CIIA) 設立の過程を捉え直す。CIIA はその設立過程と設立当初の運営において、国際関係研究の拠点としてどのような性質を持っていたのだろうか

か。本稿は、カナダを大西洋関係や太平洋関係や対米関係に位置づけ、国家間関係にとかく限定しがちな対外関係の議論に、あえて研究者などの専門家集団をも取り込むことを試みる。したがって、カナダの対外関係研究の展開を、政府と、そして専門家集団との関係で検討し、当時のカナダの国際関係観の構造を考察する。カナダの国際関係研究の再検討が目立つ昨今であるが、この考察は、カナダにおける国際関係研究の歴史的特性を問い直す試みの一端ともなるであろう。

## 2. カナダ国際関係研究所の設立

### 1) 大西洋関係

カナダにとっての大西洋関係では、歴史的に対英関係と対仏関係が中核であった。とりわけ、対英関係の場合、英連邦を含む外交関係はもちろんのこと、経済をはじめ文化や移民関係へと広範な領域に及んでいた。そして、この加英関係にとって、両国それぞれの加米関係と英米関係は不可分となっていた。このような英米加の三カ国関係をジョン・N・ブレブナー (John N. Brebner) は、「北大西洋の三角形」 (“North Atlantic Triangle”) <sup>12</sup> とよび、特にカナダをその三角形の「要」 (“linchpin”) と位置づけ、加英米の三カ国間関係にとって不可欠な存在とみなした。すなわち、カナダあってこそこの「北大西洋の三角形」であるとみなしたのである。

CIIA 設立過程では、英国の RIIA は最も重要な要因の一つであった。RIIA の先行組織である英国国際関係研究所 (British Institute of International Affairs, 以下 BIIA) <sup>13</sup> は、その起源を第一次世界大戦後のパリ平和会議にまでさかのぼり、対外関係の「科学的分析」 (“scientific study”) <sup>14</sup> を目指して 1920 年に設立され、1926 年に RIIA と改名された。パリ平和会議に参加した 3 名 <sup>15</sup> を含む 25 名のカナダ人が BIIA の会員となり <sup>16</sup>、その人たちは CIIA の創設に参加していた。RIIA との組織的・人的連携は CIIA の基盤と正当性を確固たるものにした。

1921 年にアメリカでも外交問題評議会 (Council on Foreign Relations, 以下 CFR) が、英国の BIIA (後の RIIA) との並列的な組織として誕生した。したがって、カナダに CIIA が設立された 1928 年には、英国の RIIA (前 BIIA)、米国の CFR、カナダの CIIA と、英米加三カ国それぞれの国際関係研究の機関がそろい、専門研究機関の北大西洋関係もできあがっていたといえよう。第一次世界大戦後の国際関係における安定化を追求する英米加各国の動きと、民間人関係や研究機関の関係が重層化していた。

### 2) アジア・太平洋関係

カナダの大西洋関係が重視されると、アジア・太平洋関係は軽視されがちである。歴史的にも、カナダの東部地域はヨーロッパとの関係を強調し、太平洋関係への親近感は、太平洋岸のブリティッシュ・コロンビア (BC) 州に集中しているとみなされてきた。ところが、CIIA 創設過程では、アジア・太平洋関係は大西洋関係と同様に基軸であり、当初から CIIA の中核と位置づけられていた <sup>17</sup>。太平洋岸の BC 州や平原州からの代表も CIIA の幹部となり、それぞれの地方組織も活発であった。カナダ・メソジスト教会のように日本を含むアジアで活動していた組織の影響で、東部の支部であってもアジアへの関心も高かった <sup>18</sup>。したがって、カナダがアジア・太平洋

国家であるとの認識は、太平洋岸地域にのみに限定されてはいなかったのである。

加えて、当時の IPR（太平洋問題調査会）との緊密な関係は、アジア・太平洋関係を CIAA の中核に位置づけた。第一次大戦後に、アジア・太平洋地域の安定化には相互理解が不可欠であるとの認識に基づき、太平洋諸国（アメリカ、日本、カナダ、中国、オーストラリアなど）のジャーナリストや研究者や外交官などの知識人が集まり、1925年に IPR を創設した。CIAA との関係で特筆すべきは、IPR のカナダ人メンバーが CIAA の設立に参加し、CIAA が IPR のカナダ側の事務局となったことである。

日本の対中国関係や中国をめぐる欧米列強の関心が高まる状況下で、太平洋関係を議論する IPR ではカナダも米国も重要な参加国であった。そして、大西洋関係と同じように、太平洋関係にも加米関係が埋め込まれていた。カナダの対外関係は、大西洋と太平洋に關係の両翼を広げつつあり、同時に加米関係は、大西洋とアジア・太平洋の両關係のどちらでも中核となっていた。

### 3. 専門家組織の視角から

次に、CIAA 創設に関わり、指導的な立場にいた人たちと彼らの組織に注目する<sup>19</sup>。具体的には、CIAA の設立に参加した人たちと彼らの関係組織の關係とその性質が対象となる。

#### 1) RIIA（王立国際問題研究所、Royal Institute of International Affairs）との關係

1922年に設立されたロンドンの BIIA（後に RIIA）には、カナダからロバート・ボーデン（Robert Borden）元首相、ジョージ・フォスター（George Foster）、ニュートン・W・ローウェル（Newton W. Rowell）などの政治家やジャーナリストのジョン・W・デュフォー（John W. Daffoe）やジョン・ネルソン（John Nelson）などを含む25名が参加した。RIIA 自体も、その当時すでに国境を超えた人的關係の広がり支えられていたといえる。この国境を超えた人的關係は、研究関心の共有があったからこそであり、RIIA に類似した研究機関をカナダにも誕生させる基盤であった。第一次世界大戦後、各国の国際關係研究は、研究機関を通して、国境を越えて活性化していたので、ほぼ同時期の1920年代に米国で CFR が同様な国際關係研究を目的として設立されていたことも単なる偶然ではなかった。

第一次世界大戦を経て、カナダの対英關係は変化しつつあった。英連邦への強い求心力があり、その延長上に、RIIA に見合う組織を国内に形成しようとする動きがあったといえる。単純に対等な關係を希求するというよりは、英連邦内でも自律性の高い国家としてのカナダというイメージに關係している。このような成熟しつつある対英關係の上に CIAA を設立したといえよう。その際、RIIA と CIAA の共通したカナダ人會員の存在は、かれらの多岐にわたる職業や業界の広がりゆえに、CIAA の誕生と当初の運営に貴重な礎であったといえよう。

#### 2) IPR（太平洋問題調査会、Institute of Pacific Relations）との關係

1925年の IPR 設立当時の発起人には YMCA の幹部が多く、キリスト教系国際組織が基礎の一部にあったといえよう。IPR の第一回會議には、カナダからジャーナリストのジョン・ネルソン、YMCA のスタンリー・ブレント（Stanley Brent）など、後日 CIAA の中心となる人々が出席して

いた。ネルソンは、IPR 設立の二年後に IPR の国際会議を準備する委員会のメンバーとなり、国際組織として誕生後間もない IPR でも重要な役割を担った<sup>20</sup>。したがって、ネルソンの場合、カナダ代表団の一員から国際組織の役員としての立場へと移行していった。

1927 年の IPR 会議の際に、カナダ人会員は、RIIA に類似するカナダの国際関係研究機関創設を具体的に議論し始め、翌年に CIIA を創設した。CIIA 誕生は、この IPR 会議に見つけることができよう。新しく設立された CIIA は、先行する国際組織であった IPR のカナダ支部事務局を担うこととなった。そして、ネルソンは設立当初の CIIA の事務局長となり、ブレントは CIIA のバンクーバー支部長となった。IPR の準備段階からの人的関係や、IPR のカナダ代表と CIIA の幹部が重複していた。このように、IPR のように当時国際関係に注目した国際組織の延長上にも CIIA 創設があったといえる。つまり、CIIA と IPR のカナダ人関係者の多くは、共通の幹部で構成され、同時代の国際関係の見方、組織運営のエキスパティーズなどの共有があったのである。

### 3) LNSC (カナダ国際連盟協会、League of Nations Society in Canada, LNSC)<sup>21</sup> との関係

第一次世界大戦後、国際関係の安定化を求める動きは、国際連盟への期待にも繋がっていた。LNSC は、1920 年にオタワに本部を置き、全国的な活動を展開した。当時の LNSC は、国際連盟との関係を強調し、カナダ政府に対する圧力団体にも<sup>22</sup>、市民への国際関係についての情報伝達を目的とする組織<sup>23</sup> にもなっていた。つまり、国際連盟を支持する組織として、LNSC は国境の内外に向けての活動を展開していた。

CIIA の誕生には、1920 年に設立されたこの LNSC の役割も看過できない。CIIA 創設時の主要メンバーの多くは、LNSC から参加していた。たとえば、ニュートン・ローウェルやジョン・デュフォーなどは LNSC で活動していて、CIIA 創設に参加しその幹部となった<sup>24</sup>。さらに、LNSC のモントリオール支部は、CIIA のモントリオール支部を引き受けていた。CIIA の事務局長であったエスコット・リード (Escott Reid) は、IPR と LNSC とのメンバーでもあった。LNSC 会員が、CIIA の開催する講演会に講演者を送り込むなど、CIIA の運営も積極的に支えていた。共通の会員、そして組織運営上の協力というように、CIIA と LNSC の関係は大変緊密になっていた。

当時の LNSC は、チェコスロバキア難民救援組織 (National Aid to Czechoslovakia Fund)、カナダ政治難民救援組織 (Canadian Committee on Refugees and Victims of Political Prosecution) などの NGO とも共通の幹部を通して人的にも繋がっていた<sup>25</sup>。カリン・ウィルソン (Carine Wilson) 上院議員 (自由党) のように、それらの NGO の設立、運営に幹部として積極的に参加していた人もいた。CIIA と LNSC との関係は、人の関係、組織的な関係、日常的な運営への協力関係など多角的であったといえる<sup>26</sup>。

### 4) 外務省との関係

ヨーロッパ戦線で第一次世界大戦を経験した世代が、1920 年代には実務家としてのカナダの外交官として活動していた。後に外務大臣、首相となったレスター・B・ピアソン (Lester B. Pearson)<sup>27</sup> は、当時若き外交官であった。彼の場合、トロント大学で教鞭をとった後、1928 年に外務省に入省した。そのころの外務省は、幹部の省庁間移動により内閣府 (Privy Council) と

人的つながりがかなり緊密であり、いわゆる「政府中枢機構」(“central agency”)と呼ばれる政策決定中枢の一角を担っていた<sup>28</sup>。

そのような状況で、外務省と CIIA は人材の移動を含め連携があった。たとえば、エスコット・リードは、トロント大学、オックスフォード大学で学んだ後、IPR、LNSC に参加し、1932年 CIIA の初代事務局長にも就任した。彼は、1938年に外務省に入省し、第二次世界大戦直後にはピアソン（当時外務省事務次官）の側近として働いた。その後、ジョン・W・ホームズ（John W. Holmes）も、外務省勤務、CIIA の事務局長、CIIA の所長を経験し、国際関係論やカナダ外交政策論を担当するトロント大学教授となった<sup>29</sup>。

このように、カナダ外務省入省前後に大学教職を経験した外交官も多く、彼らの外務省、大学（国内及び留学先）、さらには民間組織との関係で育成された人的、組織的な関係の中に、CIIA も存在した。この CIIA と外務省の関係には、当時の外交官の資質の高さ、そして彼らのカナダの大学で国際関係論の研究と教育の基盤づくりへの貢献があった。CIIA と外務省と大学の組織間の緊密な関係は「国際関係研究の三角形」ともたとえられた<sup>30</sup>。

## 5) 大学との関係

カナダの大学では 1920 年代に、国際関係に関連する科目が開講され始めた。第一次世界大戦後、大学にもヨーロッパで戦争を経験した人たちが教員となっていた。たとえば、ノーマン・A・マッケンジー（Norman A. M. MacKenzie）は、戦後カナダと米英両国での教育・研究期間を経て、トロント大学で国際法担当の教員となった。マッケンジーはトロントでの CIIA 設立のための会議にも出席し、設立メンバーの一人となっていた。フレデリック・H・ソワード（Frederic H. Soward）<sup>31</sup> は、トロント大学卒業後、ヨーロッパで兵士として戦争を経験した。大学院を英国で修了し、ブリティッシュ・コロンビア大学歴史学部の教員に着任した。当時まだ珍しかったカナダの国際関係史の授業を開講し、国際関係の中のカナダについて歴史学の視角から研究・教育を進めた。この新しい研究・教育領域を開拓する動機の一つには、彼自身の戦争経験があったといわれている<sup>32</sup>。ソワードは、カナダ対外関係研究のパイオニア的存在であり、CIIA の設立へも積極的に参加した。

当時まだ目新しい国際関係教育は、マッケンジーやソワードのように、法学や歴史学からのアプローチが特徴であった。その頃、既に諸大学では、国際関係に関連した授業が開設されていた<sup>33</sup>。これらのカリキュラムの拡充には、大学教員だけではなく、LNSC のメンバーの尽力があったといわれている<sup>34</sup>。CIIA 誕生への過程は、組織間の協力によって実現され、大学での国際関係研究と教育の基礎とを築いたといえる。

このように、CIIA の設立には、国際関係に関心を示す研究者の組織との協力が不可欠であった。CIIA にとって、IPR と LNSC の支援があり、国際関係研究に貢献する人材の交流があった。また、CIIA の設立に関与した専門家とその組織は、外務省や大学に広がる一方で、幹部を共有してかなり小さいサークルの規模で、CIIA が形成されていった。しかし、彼らは、大学や外務省などに限定された枠を越えて、NGO も含む人間関係や組織間関係の中で、国際関係研究の必要性の認識を共有していたといえよう。

#### 4. CIIA と社会との関係

一般的に、従来の国際関係論では、社会的要因は研究視野の周辺に追いやられていたと言わざるを得ない。より正確には、社会と対外関係を研究する試みはあったが、なかなか持続的に展開できなかったというべきであろう<sup>35</sup>。他方、国際政治経済論の分野では、「国家と社会の関係」は定番のトピックで、国家の相対的自律性とその性質をめぐる議論が展開されてきている<sup>36</sup>。社会を分析に取り込むことで、これまで未開拓とされてきた国際関係と国内政治との不可分性についての分析も可能になる。CIIA の場合も、大西洋関係やアジア・太平洋関係などの国境を越えた人的、組織的ネットワークを基盤としたコミュニティの存在を前提として、社会への発信と社会からの受信の両面について検討を試みる。

##### 1) 社会への発信

創設時から、CIIA は国際関係に関する情報を社会へ発信することを目指していた。当時すでに国際関係の知識と情報は、専門的になりがちであり、また発信者も専門家に限定されがちであったが、社会、世論に対する発信は三つのルートに分類できた。一つ目は、専門家による講演を開催することで、社会への情報発信と情報拡散をすることであった。外交官、ジャーナリストや研究者などの専門家集団を越えて、CIIA は広く関心を持つ人たちへ発信し、そのグループの拡大をめざした。国内の主要都市に設置された CIIA の支部が、発信の拠点ともなった。

二つ目の発信ルートは、大学教員や研究者、実務家を包含する組織を媒体としていた。CIIA からの出版物は、研究者にとって、また研究者を目指す人たちにとって、業績を発表する機会となった。専門家を育成することで、より長期的に広範な発信を構想していたといえる。大学教員への支援は、大学での授業を媒介としてひろく国際関係に関心を高め、理解する人材を作りだしたといえよう。

三つ目のルートは、既存の NGO などとの協力であった。たとえば、RIIA、IPR、LNSC などの国際的な活動をすでに展開していた組織との関係が深く、そしてチェコスロバキア救援基金や難民および政治的迫害犠牲者支援委員会などとの深い関係をもっていた。つまり、多くの民間組織との関係が共通の幹部人材や組織を通して構築されており、相互の活動を円滑化してきていた。緊密に協力し合う組織間関係を媒体に社会へ発信したといえよう。

CIIA の組織構造は、カナダ国内の地域差に対してどのような発信をしていたのだろうか。CIIA の本部はトロントに設置されたが、支部は、モントリオール、オタワを始め、東部のハリファックス、平原州ではウィニペグなどの諸都市、そして太平洋岸のバンクーバーにも開設された。CIIA の組織は、モントリオールにも存在し、地域的にケベック州も包含し、全国的な研究組織としての構造をもっていた。しかし、CIIA 設立の定款において、会員は英語系であることが決められていた<sup>37</sup>。会員の英語系の限定は、ケベック社会の当時の構造という文脈ではフランス語系人口比率との矛盾は少なからず存在したと推定できよう。第一次世界大戦中の徴兵制度によって、国内の英語系とフランス語系の関係が軋轢を経験した後であるだけに、社会構造との関係には少なくとも齟齬の状況があったといえよう<sup>38</sup>。

さらに、前述で、専門家の組織と CIIA の関係でも触れたが、CIIA の発信先は、必ずしもカナ

が国内に限定されてはいなかった。CIIA は、当初から RIIA などの海外の国際関係研究機関との関係を根幹に据えていたし、アメリカの CFP との関係も存在した。そして、研究会議や出版物を通して対英関係や対米関係よりもさらに広い地域の研究者に対しても発信をしていたといえよう。

### 3) 社会からの受信

社会との関係で、CIIA は何をどのように受信をしていたのだろうか。これまでも見てきたように、海外の先行研究機関であった RIIA や CFP との関係が、CIIA を設立する過程で礎となってきた。特に、RIIA との関係は、CIIA にとって国境を超えた基盤であった。CIIA 設立へ参加した NGO の関係者も、NGO 間の共通メンバーを土台としたネットワークをも形成していた。CIIA との関係で注目すべき社会の範囲は、多種の行為体と其中的の人間関係であり、国境や大西洋、太平洋を超越していたといえよう。つまり、CIIA は、多様性を包含する国境を超えた民間組織のネットワークを媒体として社会につながっていた。

カナダ国内の社会的多様性と CIIA の受容には、齟齬がなかったとはいいがたい。フランス語系住民の比率が高かったケベック州のモントリオールにも支部が設置されたが、言語的には英語中心であった。当時のモントリオール、ケベック州のエリートでも、英語系と仏語系の軋轢との関係も今後検討すべきかもしれない。社会からの受信は限定的ではあったが、CIIA と民間組織にメンバーが重複していたことは、同時に広がりも見えていた。

CIIA には、政治家、外交官やジャーナリストや研究者が集い、国際関係および対外関係についての幅広い認識を持ち込み、社会からの受信が可能となっていた。CIIA が開催する講演会や研究会議なども、多様な見方を受信する貴重な機会ともなった。大学への研究支援にとどまらず、大学や外務省、そして民間組織との人的交流が、組織的関係の創設と維持と発展に効果的だったといえよう。組織間の共通する参加者によって CIIA に持ち込まれた国際関係観は、さらに研究所の活動に携わる人、研究所が開催する行事、そしてその出版物などを媒体として発信されたといえる。受信と発信の循環が円滑だったと単純に総括すべきではないが、やはり CIIA という研究機関を通して少なくともある程度の受信と発信が繰り返されたとみるべきであろう。CIIA の構成員は、エリート中心で人数的には限定されているとはいえ、カナダの国外にも開かれた多様な組織を横断する諸々の会員にも支えられていた。

## 5. 結

第一次世界大戦後には、国際的安定を切実に希求する試みが、国境や地域を超えた知的な関心と探求を呼び起こした。本稿で分析した CIIA 創設のプロセスは、まさに国際関係の安定化を追求する当時の国際的な知的な模索の中に存在していた。

本稿は、CIIA 創設のプロセスと当時の国際関係観の性質の検討を試みた。国家間の関係で国家の代表や外交官などに注目するのに対し、研究機関設立と草創期にどのような国際関係観が関係したかを分析した。CIIA は、英国の先行する RIIA との連繋を土台に、国際関係、特に対英国関係について、加米関係をも視野に入れて理解すべく設立された。この設立のプロセスにおいて、

対外関係に興味をもつ研究者や外交官や NGO 関係者は、国内だけでなく、国際連盟協会、太平洋問題調査会などの国際組織と関係し、人的資源を共有し、組織間協力しながらの国際関係研究機関設立の必要性を見抜いていたといえる。社会からの複数の見方を受信し取り入れようとした営為は、CIIA とその関係者の国際関係観も社会との関係を持ちながら存在していたといえよう。CIIA とフランス語系の人たちとの関係では、齟齬が全くなかったとは言い難いが、公式と非公式、国家間関係と民間組織間と人的関係などが、複数の層にわたる大西洋とアジア・太平洋関係や、それら両方の関係に組み込まれていた。小さいサークルでの人々の関係が設立に関係していたとも言えるが、複数の組織に重複するメンバーを含むことで多様性の包含と広がりも見られた。

CIIA 設立から 80 年後に当時の状況を再検討することは、最近のカナダの対外関係研究にどのような示唆があるだろうか。カナダの国際的役割を国際連合などの国際組織との関係、そして 2001 年米国同時多発テロ以来の国際関係における役割をも含め、さまざまな問い直しが始まっている<sup>39</sup>。また、研究上の課題として、カナダの国際関係研究の特徴を問い直すことも進みつつある。つまり、アメリカの国際関係論との関係をどのような性質のものとするべきなのか。何をどこまでカナダ的とみなすのか、あるいは何が時代の普遍的な特徴とみなすのか。これらの研究の根本にも挑戦する問いかけによって、さまざまな研究史上の検討も進んでいる<sup>40</sup>。CIIA が、国境を超えた複数の組織を基盤とし、社会の複数の立場からの研究を紡ぐ契機となったことを考えると、研究から社会へ発信すべきは、時代に共通する、あるいは異なる国際関係観をどこまでも凝視しようとする真摯な姿勢であろう。そこに、国際関係研究における関心の収斂と国境を超えた広がりとも組織化が見出され、研究の位置づけと役割を再考する契機ともなる。

最後に、カナダの国際関係研究の土台形成を検討することで、日本における地域研究、国際関係論研究についても考察する必要がある。研究と教育における国際交流が存在するが、一部の研究が時流という名のもとに鵜呑みのまま過大に反映されるなど、とかく偏向しがちな性質については今後もねばり強い検討が必要であろう。そのためにも、研究機関を中心とした研究者の関係とその性質を分析しなければならないであろう。組織間の協力による研究の促進、そして社会との関係など、国際関係研究はまだまだ研鑽の道程にあるといえよう。研究者自身が、省察的に研究の土台となっている国際関係観の性質を検討する営為が求められている。

## <注>

- 1 2007 年、CIIA は国際統治イノベーションセンター (Centre for International Governance Innovation) とカナダ国際協議会 (Canadian International Council) に統合された。
- 2 Peter M. Haas, "Introduction: Epistemic Communities and International Policy Coordination," *International Organization*, 46:1, 1992.
- 3 Robert W. Cox, "The World Economic Crisis," in Robert W. Cox, *Production, Power, and Order: Social Forces in the Making of History*, New York: Columbia University Press, 1987, p.294.
- 4 最近の例としては、遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの歴史と思想』有斐閣、2010 年は、国際関係観の思想的側面を歴史的文脈からも検討している。
- 5 カナダ外交の従来の典型的な見方は、「ミドル・パワー」論に代表される。ここでは、カナダ外交官の資質や能力による円滑な外交が強調されてきた。ミドル・パワー論については拙稿「カナダ外交政策研究の変遷と模索 (1960-1990)」『カナダ研究年報』11 号、1992 年。
- 6 NGO については、たとえば以下の拙稿参照。「ユニテリアン・サービス・コミッティー・オブ・カナダ (USCC) の草



- 創期（1945-1960）——超国境性と組織のカナダ化のはざままで『国際学研究』22号、2002年。「カナディアン・ルサラン 国際救援組織（CLWR）——ユニテリアン・サービス・コミッティー・オブ・カナダ（USCC）との比較分析（1945-1960）」『国際学研究』24号、2003年。「NGOと社会との関係についての一考察——カナダ国際援助大学機構（Canadian University Services Overseas, CUSO）の設立と初期の活動（1961-1975）」『国際学研究』、28/29号、2006年。「国際行為体としてのNGO再考——リアリズムと市民社会論を超えて」『国際学研究』33号、2008年。
- 7 Michael Byers, *Intent for a Nation*, Toronto: Douglas and McIntyre, 2007. Andrew Cohen, *While Canada Slept*, Toronto: McClelland and Stewart, 2003.
  - 8 Mark Neufeld, and Teresa Healy, “Above the ‘American Discipline’: A Canadian Perspective on Epistemological and Pedagogical Diversity,” in *International Relations—Still an American Social Science?*, Robert M.A. Crawford, and Darryl S.L. Jarvis, eds., New York: State University of New York Press, 2001.
  - 9 ロバート・ボーデン（Robert Borden）元首相（保守党、首相在位1911-1920年。）、ジャーナリストのJ・W・デュフォー（J.W. Dafoe）、弁護士で政治家のニュートン・ローウェル（Newton Rowell）、ジャーナリストのジョン・ネルソン（John Nelson）など多くの、広範な職業、地域の人々に支えられていた。
  - 10 全国的な支部組織にもかかわらず、英語系中心となっていたことも否めない。
  - 11 CIIA についての先行研究は、二つのグループからなる。一つは、第一次世界大戦後の政府や学会との関係に、CIIA 設立の理由を見出すタイプの研究である。設立50周年（1978年）に、研究所の刊行誌（*International Journal*）は、設立当時の外務省と政治家や研究者の関係について特集した。*International Journal*, Winter, 1977-78. もう一つのグループは、CIIA が太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations, 以下 IPR）のカナダ事務局であったことに注目した研究である。山岡道夫と片桐庸夫の研究は、先駆的ではあるが、焦点が限定されがちであり、当時の国際関係やカナダの研究・教育との関係まで分析しているとはいえない。山岡道夫『アジア太平洋地域の INGO』北樹社、1996年。山岡道夫「カナダ太平洋問題調査会の戦前期の活動について：カナダ国際問題研究所の設立過程を中心として」『アジア太平洋研究』vol. 4, 2002年。山岡道夫「カナダ太平洋問題調査会の戦前期の活動」『国際関係に関する知の制度化』論創社、2005年。片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究——戦間期日本 IPR の活動を中心として』慶応義塾大学出版会、2003年。
  - 12 John N. Brebner, *North Atlantic Triangle: The Interplay of Canada, the United States and Great Britain*, Toronto: McClelland and Stewart, 1996.
  - 13 BIIA 設立のためには、カナダ人の篤志家も資金援助していた。Letter from R.W. Leonard to William Lyon Mackenzie King, Prime Minister, December 15, 1923, National Archives of Canada (NAC) William Lyon Mackenzie King Paper, MG26-J1 vol. 89, page 75560-75561. T. B. Millar, “Commonwealth institutes of international affairs,” *International Journal*, 33:1, 1977-78 Winter, p.8.
  - 14 Letter on Tribute to Mr. Lionel Curtis, from Chairman of Council, RIIA to Professor Mackenzie, Jan/March, 1931, NAC, Canadian Institute of International Affairs (CIIA), MG28 I250, vol. 6 N.A.M. Mackenzie : CIIA material.
  - 15 Sir Robert Borden, Sir George Foster, Loring Christie.
  - 16 後に CIIA の事務局長になるニュートン・ローウェルも含まれていた。
  - 17 Executive Council Meeting, January 21, 1929, NAC, CIIA, MG28 I250.
  - 18 たとえば、ローウェルはアジアで布教活動をするカナダ・メソジスト教会で、アジアに関する関心がとても高かった。Edward D. Greathed, “Antecedents and Origins of the Canadian Institute of International Affairs,” in Harvey L. Dyck, and H. Peter Krosby, eds., *Empire and Nations: Essays in Honour of Frederic H. Soward*, Toronto: University of Toronto Press, 1969, p.101. 日本でのカナダ人宣教師の活動については、たとえば新堀邦司『海のレクイエム——宣教師 A・R・ストーン の生涯』日本基督教団出版局、1989年参照。
  - 19 設立時のメンバーは、以下の人たちであった。Rt. Hon Sir Robert Borden, Sir Arthur Currie, John W. Dafoe, Sir Joseph Flavelle, C.S. MacInnes, Hon. Newton Rowell, F.N. Southam, R.W. Brock, C.A. Bowman, John Nelson, John Mackay, Stanley Brent, Norman A.M. MacKenzie.
  - 20 山岡「カナダ太平洋問題調査会の戦前期の活動について：カナダ国際問題研究所の設立過程を中心として」『アジア太平洋研究』vol. 4, 2002年。
  - 21 1945年には、カナダ国際連合協会へと組み込まれていった。詳細は以下を参照。Donald Page, “The Institute’s ‘popular arm’: the League of Nations Society in Canada,” *International Journal*, 33:1, 1977-78 Winter.
  - 22 この立場は、Page, *ibid.*, p.29.
  - 23 LNSC, *Interdependence*, vol. 4, No. 10, 1927, pp.48-49.
  - 24 Page, *op.cit.*, p.35.
  - 25 *Ibid.*, p.50.
  - 26 拙稿「ユニテリアン・サービス・コミッティー・オブ・カナダ（USCC）の草創期（1945-1960）」。拙稿「NGO（非政府組織）と社会との関係についての一考察」。
  - 27 のちの外務事務次官、外務大臣、首相、ノーベル平和賞受賞者。
  - 28 政府機関間の距離を測定することの難しさにより、単純な比較は難しい。しかし、幹部の移動、登用など公式のつながり以上に、人的な非公式な関係も存在することを考えると小さな権力機構の存在とみることも可能であろう。たとえば、以下を参照。John Hilliker, *Canada’s Department of External Affairs, The Early Years: 1909-1946*, Montreal: McGill-Queen’s University Press, 1990.
  - 29 John Holmes, *The Better Part of Valour*, Toronto: McClelland and Stewart, 1970. Adam Chapnick, *Canada’s Voice: The Public Life*

- of John Wendell Holmes*, Vancouver: University of British Columbia University Press, 2010.
- 30 F. H. Soward, "Inside a Canadian Triangle: the University, the CIIA, and the Department of External Affairs A Personal Record," *International Journal*, 33:1, 1977-78 Winter.
  - 31 F. H. Soward, *Twenty-Five Troubled Years, 1918-1943*, London: Oxford University Press, 1943. F. H. Soward, *The Department of External Affairs and Canadian Autonomy, 1889-1939*, Ottawa: The Canadian Historical Association, 1972.
  - 32 Soward, "Inside a Canadian Triangle," pp.66-67.
  - 33 ダルハウジー大学、マウント・アリソン大学、マギル大学、トロント大学、ウェスタン・オンタリオ大学、マニトバ大学、サスカチュワン大学、アルバータ大学、ブリティッシュ・コロンビア大学。
  - 34 Page, *op.cit.*, p.50.
  - 35 たとえば、E・H・カーは 1930 年代後半に、国際関係と社会、世論との関係がすでに議論されていた。E・H・カー『危機の二十年、1919-1939 年』岩波文庫、1996 年。
  - 36 Theda Skocpol, "Bringing the State back in," in *Bringing the State back in*, Peter B. Evans, Dietrich Rueschemeyer, and Theda Skocpol, eds., Cambridge: Cambridge University Press, 1985.
  - 37 CIIA の定款第三項。
  - 38 その軌跡の性質については、今後の検討を必要とする。
  - 39 たとえば、以下を参照。Byers, *op.cit.* Cohen, *op.cit.*
  - 40 以下を参照。Neufeld, and Healy, *op.cit.*